5 月号　　平成２７年４月３０日発行

荏田小だより

横浜市都筑区荏田南町６９４番地［TEL 911－0149］
アドレス［http://www.edu.city.yokohama.jp/sch/es/eda/］

時　間　の　長　さ

校　長　　澤田　有子

明日からは、風薫る五月。あっという間に四月が終わってしまったように感じます。学校の一年は、年度初めにそれぞれの校務分掌で一年間の計画を立てることから始まります。一年後の子どもたちの成長の姿を思い描きながら、常に先の見通しを立てて計画準備し、教育活動を行っていくからなのでしょうか、時間がこんなにも早く過ぎ去ってしまうように感じられるのは。

19 世紀のフランスの哲学者ポール・ジャネーは、時間の長さについて、つぎのような法則を提唱しました。「50 才の人間にとって一年の長さは、人生の 50 分の 1 ほどであるが、5才の人間にとっては5分の1に相当する。よって、50才の人間にとっての10年間は、5才の人間にとっての1年間にあたり、5才の人間の一日が、50才の人間の10日にあたることになる。つまり、人の感じる時間の長さは、自らの年齢に反比例する。」という主張です。

さて、5才の子どもと50才の大人が、体感的に感じる時間の長さの違いはどこからくるのでしょうか。私は、人間が受け取る情報量の多寡に起因するのではないかと思っています。例えば、車を運転して、これまで行ったことがない初めての場所に行くときには、往路のほうが復路の時間よりもずっと長く感じることを、私たちは経験から知っています。往路は、目に入ってくるものがすべて新しい情報であり、目的地に着くまでには大量の新しい情報の処理を脳の中で行わなければなりません。これに対して復路は、既知の情報を処理することが大半を占めるので、その結果、新しい情報量が多い往路の方が復路よりも、時間の経過を長く感じるのではないでしょうか。同様に、子どもにとってはこの世の中のことすべてが未知であり、毎日大人よりも多くの新しい情報を受け取っているので、時間が長く感じられるのでしょう。

もし、環境が変わることを恐れることなく、新しい何かをたゆまず追い続けていくことができたならば、もし、好奇心というアンテナを高く掲げ、前に進んでいくことができたならば、定められた「命の長さ」をより豊かに体感できるにちがいありません。

ガーデニングボランティアの皆様、これからもよろしくお願いします！

昨秋、駐車場花壇に荏田ガーデニングクラブの方々が植えてくださった花が、今、こんなにきれいに咲いています。

放課後、中庭で「お花がきれいねえ」と言いながら遊んでいた子どもたちをパチリ！春の息吹を感じてくれたかな。学習の中でも、花の観察等をしています。